

瀬戸内市民図書館 セとうち発見の道企画展

「邑久古窯跡群の工人奮闘記」

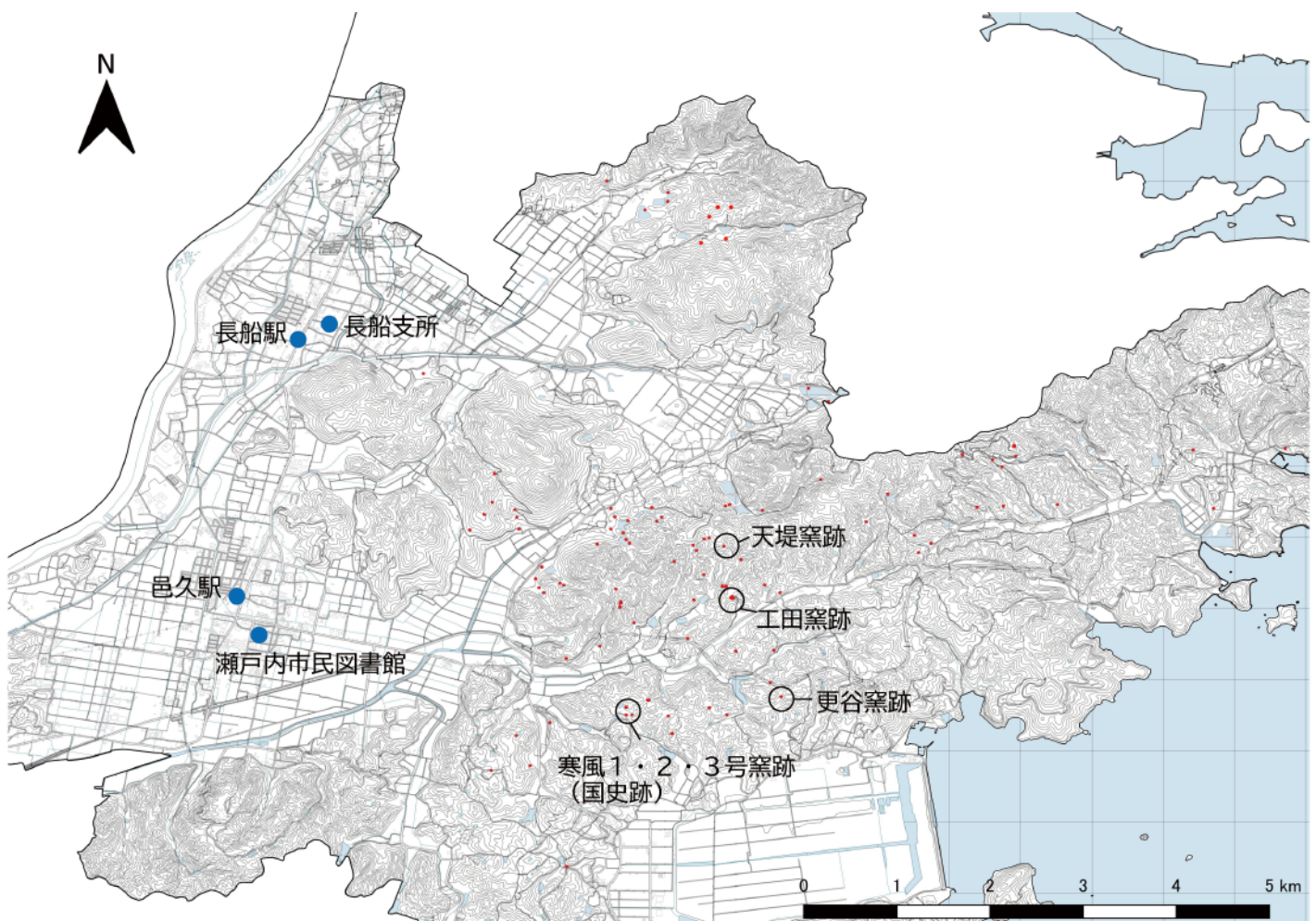
会 期：2025年12月2日(火)～2026年3月1日(日)

展示担当：瀬戸内市産業建設部文化観光課

瀬戸内市には、国史跡である寒風古窯跡群（牛窓町長浜）を代表とする奈良時代から平安時代にかけて操業した須恵器の窯跡群である邑久古窯跡群があります。須恵器の生産地である本市では、製品になる須恵器は出荷され、製品にならなかった大量の須恵器が廃棄され、今も残っています。

残された須恵器からは、当時の工人たちが試行錯誤を重ねながら須恵器を作っていた様子がうかがえます。

今回はこのような製品にならなかった須恵器に着目し、千年以上前の工人たちの奮闘の記録をご紹介します。



邑久古窯跡群（窯跡は赤点で表示しています。）

【須恵器工人の試行錯誤を観察しよう！！】

スペースの有効活用！？高坏 on the 平瓶



ひらか たかつき
平瓶のうえに高坏を載せ、焼成した例になります。窯内という限られた空間の中で、より多くの製品を焼くために重ね焼きという手法がとられました。今回もスペースを有効的に使おうとしたのかもしれませんが、結果潰れてくっついてしまっています。

当時の流行？杯 side 甕



かめ
本市内から出土する甕には胴部に杯を貼り付けたものが複数の窯で確認されています。今回の展示でも天堤窯跡・更谷窯跡・寒風窯跡から同様の例が確認されました。あまづつ さらに
緑色の液体は、焼成時に溶けた自然釉が流れて固まったものです。焼成中に杯が割れ内部に自然釉が流れています。この杯は何のために貼り付けられたのでしょうか？これだけ多いと甕を焼くための道具とも考えられますが結論は出ていません。

原形分からず！甕・杯・甕の sandwich



本品は同様に甕の胴部に杯をつけていますが、歪んで割れながら折り重なった形で焼成された例になります。このように潰れるのは薄く作っていたことや窯詰めが要因と考えられます。液体を貯めるための甕なので丈夫さはもちろん、持ち運びのために薄く、軽くする必要もありました。当時の工人もそのバランスを手探りで探していたと考えられます。